まち歩きから実践へ：水沙連キャンプにおける地域と学びをつなぐ実践の歩み

田蕙菁 専任アシスタント、林可凡 専任アシスタント、張力亞 副教授

（国立暨南国際大学 地方創生・越境ガバナンス修士学位プログラム）

一、地域を学びの現場とする試み

高等教育が社会や地域のニーズに応答する方向へと進むなかで、学生が教室を出て実際の現場に入り、主体的な参加を通して地域課題や生活の文脈を理解することは、近年の大学教育・実践における重要なテーマとなっている。一方向的な知識伝達に比べ、リアルな場と結びついた学習経験は、学生が行動の中で観察し、振り返り、社会に応答する力を養うことを可能にする。

「水沙連」地域は、豊かな生態資源、多様な民族文化、そして厚みのある人文・歴史的背景を有し、古くから中部台湾における重要な生活・産業圏を形成してきた。広義には、水沙連は南投県竹山鎮の一部地域（田仔渓以南の山間部を除く）に加え、鹿谷郷、名間郷、集集鎮、水里郷、信義郷、魚池郷、埔里鎮、国姓郷、仁愛郷などを含む。狭義には、主に現在の埔里鎮および魚池郷を指すことが多い。このような多層的な地理的・歴史的定義は、水沙連を生活の場としての豊かな広がりを示すものであり、水沙連キャンプの設計における重要な基盤ともなっている。

以上の背景と学習的文脈を踏まえ、国立暨南国際大学（以下、暨南大学）の USR プロジェクト「WALK TALL：アウトドア教育学習エコシステムの革新」は、「水沙連を暨大师生の学習の場とする」ことを中核理念として掲げ、「水沙連キャンプ」を企画・推進している。本プログラムでは、南投・水沙連地域の自然環境、歴史文化、地域生活の資源を、学生が実際に参加し体験できる学習内容へと転換することを目指す。実際のフィールドワーク（まち歩き）を通して学生を地域へと導き、歩き、体験し、実践する過程の中で、人と土地との関係を再認識させるとともに、水沙連地域へのローカルアイデンティティ（地域への帰属意識）を育むことを期待している。

二、水沙連キャンプの推進の歩み

水沙連キャンプは、暨南大学通識教育センターによる「水沙連を歩いて学ぶ新入生キャンプ」シリーズの学習的文脈を継承し、暨南大学・水沙連学院による USR プロジェクト「WALK TALL：アウトドア教育学習エコシステムの革新」における重要な実践の一つとして展開されている。2023 年（民国 112 年）より、「水沙連全体を暨大师生の学習の場とする」という理念のもと、授業、ワークショップ、フィールド実践などを組み合わせ、地域のコミュニティ団体と協働しながら体験型学習活動を企画してきた。学生を埔里および周辺地域へと導き、人文景観、伝統工芸、地域生活について学ぶ機会を創出している。

活動内容は、市場を歩くフィールドワーク、水路（灌漑用水路）の生態観察、町を自転車で巡る探訪、地域工芸の創作体験、地元農産物の加工体験など多岐にわたる。参加者が日常生活のスケールから実体験を通して水沙連地域の環境を再認識し、地域に対する感受性と実践力を育むことを目指している。

推進の初期段階では、学生が埔里および周辺地域についての基礎的理解を築くことを目標とした。112 学年度には、各学期に複数回のまち歩きルートを企画し、埔里の若手起業チームや特色ある店舗と連携しながら、木生昆虫博物館、広興紙寮、眉渓、猫囒山などを訪問した。実地での探索を通して自然生態や人文・歴史を学び、徒歩や自転車によって町のテクスチャー（都市の肌理）を丁寧に体験することで、地域への理解と情緒的なつながりを徐々に深めていった。

実践経験の蓄積とともに、規模およびテーマも継続的に拡大している。113 学年度には、テーマを河川と水文化、生態環境、歴史古道、産業と工芸などへと広げ、「体験を通して学ぶ（Learning by Doing）」要素をさらに強化した。例えば、沢登りを伴うフィールドワークや農産物加工体験などを取り入れている。114 学年度には、埔里の地域生活と環境に焦点を当て、地域コミュニティとの相互作用を重視するとともに、学生が実践の中で担う役割の転換にも力を入れている。

114 年末時点で、水沙連キャンプは累計 20 回開催され、延べ参加者数は 486 名に達している。地域を核心とし、学生の学習を軸とするアウトドア教育の実践モデルが、段階的に形づくられてきている。

三、特色ある活動の紹介

水沙連キャンプの活動設計は、「身体的参加」と「フィールドに根ざした学習」を重視し、多様なテーマを通して学生がさまざまな視点から地域を理解できるよう工夫されている。

暨南大学が位置する水沙連地域は、年間を通じて水気に恵まれた山林環境を有する非常に特色ある地域である。同時に、ブヌン族、タイヤル族、セデック族、サオ族、ツォウ族という五大原住民族が暮らし、さらに埔里地域には平埔族の子孫も居住している。こうした多様な民族の移動と交流の歴史をより深く理解するため、「水沙連古道との出会い」フィールドウォークを企画した。学生と教職員は、埔里と水里を結ぶ水沙連古道を実際に歩き、ガイドの解説を通して、漢民族・原住民族・平埔族がこの地で交錯し、移動し、相互作用してきた歴史的文脈を学ぶ。実地踏査を通じて、古道が交通路であると同時に文化交流の通路でもあった意義を体感する。

また、「眉渓印象：沢登りフィールドワークの旅」も企画し、渓流を学習の軸として、学生を眉渓中流域へと導く。地形や水文学、灌漑用水路の歴史に至るまで学び、渓流がどのように埔里の農業発展や人文景観を形成してきたのかを理解する。沢登りの過程では、自然観察力を養うだけでなく、環境保全や水資源問題への感受性も高めている。

さらに、大埔里地域はかつて「埔里蝶の王国」と称されるほど生態的に豊かな地域であった。しかし経済開発の進展により、その生態的景観や地域イメージは次第に薄れた。とはいえ、921 地震後のコミュニティ再建以降、新故郷文教基金会、桃米コミュニティ、一新コミュニティ、南豊コミュニティなどの地域団体は、生態種の生息地再生に積極的に取り組み、地域の生態環境の回復を目指している。こうした背景のもと、暨南大学水沙連学院の USR プロジェクトは、新故郷文教基金会および桃米コミュニティと協働し、「蛙と蝶の共舞」フィールドウォークを企画した。活動では、地元食材を用いた体験、ビオトープ造成、外来種の除去作業などを組み込み、参加を通じて生態系の共生概念を理解できるようにしている。

加えて、埔里地域は多様で豊かな地場産業を有している。そこで、水沙連 USR プロジェクトは、豊年農場、順騎自然有限公司、広興紙寮、龍南漆器

などと連携し、「地域特色産業フィールドウォーク」シリーズを展開している。「きのこ漫遊」「自転車で巡る埔里」「紙と漆の物語」などの活動を通じて、学生は実際に産業拠点を訪れ、体験を重ねる。参加者の視点から地域産業や職人の仕事を再発見し、学びを知識レベルにとどめず、具体的な経験として蓄積していくことを目指している。

四、地域を核とした学習協働：水沙連キャンプにおける **USR** 実践の意義

総じて言えば、水沙連キャンプの推進は、単一の授業や活動の積み重ねではなく、学内の教育資源、プロジェクトチーム、そして地域フィールドを結びつけた統合型の学習実践である。暨南大学水沙連 USR プロジェクトの支援のもと、水沙連キャンプは、地域ガイド、コミュニティ団体、若手起業チーム、専門職人などをつなぎ、学習設計に共同で参画してもらう仕組みを築いてきた。これにより、地域は単に「訪問される対象」ではなく、大学とともに学習経験を共創するパートナーとなっている。

この枠組みにおいて、学生の学びは教室内の知識にとどまらない。実際に地域へ足を運び、人々と交流し、手を動かして実践する中で、環境や社会課題への理解を段階的に深めていく。学生のフィードバックからは、日常生活の身近にある地域資源を新たに認識したという声が多く聞かれる。たとえば、千年茄苳樹や眉渓流域、埔里のサイクリングルートへの理解、あるいは桃米コミュニティの生態保全の歩み、伝統工芸や地域産業の変遷に対する深い印象などが挙げられる。

これらの学習経験は、一方向的な知識伝達ではなく、実際に歩き、観察し、体験することから生まれている。また、水沙連キャンプで設計された「行いながら学ぶ（Learning by Doing）」活動は、学生に環境問題や地域産業についてより具体的な実感と内省を促している。外来種駆除活動に参加し、ジャンボタニシが生態系に与える影響を理解すること。ホタルの再生やビオトープづくりを通して、地域が長年積み重ねてきた保全の努力を体感すること。あるいは天然漆や製紙工芸の実作体験を通じて、伝統産業が現代社会で直面する継承の困難とその価値を見つめ直すこと——これらはいずれも、知識習得を超えて、人と環境、産業と暮らしの関係を深く考える契機となっている。

暨南大学水沙連学院の USR プロジェクトにとって、水沙連キャンプの意義は、活動回数や参加人数の蓄積にあるのではない。むしろ、持続可能な地域学習モデルを段階的に形成してきた点にこそある。この仕組みによって、

学生は異なる段階やテーマのもとで繰り返し地域に関わり、地域の特色を理解しながら情緒的なつながりを築くことができる。同時に、地域コミュニティにとっても、大学との長期的な協働の可能性が開かれている。

今後も水沙連キャンプは、教育・研究・社会実践を結ぶ重要なプラットフォームとして機能し続けるだろう。地域のニーズに応えながら、学生が現実社会に向き合う観察力、行動力、そして責任感を育む場として、さらなる発展が期待されている。